

第 90 回 帰宅困難者対策は防災課題か

IT生

このところの大雪で、阪神間も珍しく何年かぶりに積雪となった。この日、六甲の駅に降り立ったのが午後 10 時ごろ。駅から神戸大学キャンパスに向かう坂は車道も歩道も真っ白。タクシー、バス乗り場ともに長蛇の列ができていた。六甲の駅は、山から寒風が吹き下ろす場所にある。どうせ寒風にさらされるならじっと待っているほうが寒いと感じ、徒歩で上がることにした。途中、コンビニでホットティを買い、ちびちび飲みつつ、懐にいれつつ、急こう配（最大 18%）の坂をジグザグにそろそろと登って行った。すると 20 分ほどで自宅にたどりついた。なんのことはない、ふだんより 5 分ほどかかっただけだった。

今年の 117 特集の取材では、帰宅困難者対策を対象にした。これまでは、災害時の帰宅の問題など、冒頭の私の経験のように、放って置いても人は三々五々動き出すので、自動的に解消されると踏んで、帰宅困難者対策を防災課題として取材対象にしてこなかった。ところが、東日本大震災直後の首都圏や大阪北部地震のあとの関西の経験から、混乱回避のために「帰宅抑制」が当然のように呼びかけられていることに違和感を感じ、今回は真正面から取り組んでみることにした。



行動抑制から命を守る行動への呼びかけに変わりつつある帰宅困難者対策

記事では、「帰宅抑制」が可能となる前提として待機すべき職場や駅などの大規模集客施設の耐震化、耐火が十分であるか、大阪の場合は、南海トラフ地震の津波の心配があるので、「帰宅抑制」以前に「まずは命を守る行動」を呼びかけた。また、大阪や東京、京都では海外からの観光客が年間1千万（コロナ前）にもものぼる。これらの人々を安全に誘導する取り組みも必要だとも指摘した。こう考えると、立派な防災課題だ。

しかし、従来の帰宅困難者対策として行政が呼びかけてきたのは「帰宅抑制」だ。つまり、道路が車や人であふれると救急や消防活動に支障がでるということを懸念している。客観的に考えればこうしたことへの配慮も必要だが、現実問題として、大災害が起きれば、我が身大事で行動するのが人間だ。だから、「まずは命を守る行動を」と呼びかけ、そのうえで、救命、消防活動に配慮をと協力を求めるのが筋だろう。とかく管理をしたがるのが日本の行政。そして「なぜ人々は避難をしないのか」と嘆いて見せる。そのたびに、「羊飼いでもあるまいし」とうそぶいてしまうが、それでは羊飼いに失礼だと最近気づいた。羊飼いは一頭一頭の性格や行動パターンを把握しているそうである…。

（令和5年1月）